

## インドシナ境界における民族と

## 国家形成の歴史地理的一考察

太田晃舜

## はしがき

インドと中国の中間に位置するインドシナ地域は、特に地形など自然条件の影響により、それぞれ文化の浸透度と、政治的地域形成にとって、きわめて複雑な条件を醸成するにいたった。特に大河流域や沿岸地域の低地や山間の高地地域とでは、民族の移動や分布に特異性が認められる。

半島における民族移動を年代的に記録することは困難であるとされており、また、各民族自身に関しても未研究の分野が多いため、細部にわたり明確を期することは、きわめて至難な業である。なお、分離性の強いインドシナを総合的に理解する努力が一般にきわめて不十分であり、したがって、ここでは民族移動の方向や文明の伝播、政治地域形成の傾向をごく概念的に、歴史地理的立場からたどり、地域性を知る一助に供したいと思う。

## 一 民族移動の概要

インドシナには、インドに起源をもつ先住民と、東亜に起源を持つ先住民との接触がみられ、彼らは文化や宗教や言語に影響を残している。古いヒンズーの伝統はカンボジアを中心とし、中国人の伝統はトンキンを中心とする。それゆえに、メコン河とソンコイ河の低地では民族的にも異っている。その中間は、これら民族と、いろいろな経済発展の段階にある移動丘陵民族とがたがいに影響をおよぼす所である。そしてこれらの丘陵地の民族は、一部は北から陸路を通って移動してきた放浪者たち、一部は低地からの避難民から成っている(1)。

インドシナ全般を通じて、北から南に向ってくり返して行なわれた民族の移動の跡が顕著である。次々に押しよせた移動の波は、先住の民族を駆逐し、あるいは同化して行った。先住者は、山間や岬角、島などに逃避して独自性を保持した。河川流域・山地・盆地・高原などの複雑な地形条件が、民族の分布特性を決定する大きな要因となったのである。この錯綜した民族分布は、今なお人類学的に不明な面が多い(2)。

元来インドシナ半島には、モン・クメール系諸族(オーストロアジア語族)が住んでいた。彼らは先住のマレー系人種を駆逐して、半島の大部分を占居し、西隣のインド文明をとり入れて強大な国家(扶南国や真臘国)を建設したが、後来民族のために圧迫寸断されて、今日ではカンボジアのクメール族(Khmer)やサルウインデルタのモン族(Mon)のごとく、各地に孤立的に残存するに過ぎない。後来民族とはすなわち、チベット高原に発する数条の河谷に沿って南下したインドシナ語族と呼ばれるモンゴロイドの大集団で、これにはまず北西から来たチベット・ビルマ語系諸族と、ついで北東から来たタイ・シナ語系諸族とがあり、前者はビルマ族(Burman)後者はタイ族(Tai)によって代表される。とくにタイ族はすでに中国南部においてかなり高度の文化を創成した後、西暦紀元初頭から一三世紀にかけて集団的に移住してきたものであることが注意される。また、半島の東海岸には、強くシナ文明の影響を

受けた安南人(Annamese)が北方より進出してきている。彼らはタイ・シナ語族とオーストロアジア語族との混種らしい民族であるとされている。また、その起源は不明であるが、マレー系のインドネシア族であるチャム族(Cham)はかつてチャンパ国(占城)を建てたが、安南人の南下のために圧迫されて今日半島東南部に少数残存しているにすぎない(3)。

今日のインドシナの文化的性格は、いついかなる時代のどんな要素の交替によって形成せられたものであろうか、この問題は補正されるべき諸説が多く、非常に困難な課題である。

最古の文化的状況においては、インドシナはそのままインドシナと呼ばれるにはかならずしもふさわしくない状況だった。一〇世紀を中心とする時代においては、それはとりわけインド的(ヒンズー的)であったのであり、一方、紀元前後およびそれ以降のトンキン・北部アンナンのシナ化ならびに初期タイ文化を南シナ農耕文化的という意味でシナ的と呼びえても、それはあくまでアンナン・タイ両民族の居住地域に限られており、シナの要素の比較的広範な普及を意味することはできなかった。これに比すればインド的(ヒンズー的)要素はとくに社会の上層に対しては、いついかなる時代にもたえず流入して止むことがなかったといえよう。

中世以後においてはシナ人・アラビア人の交易を通じて、各般の影響が波及したうえ、近世初頭以来のヨーロッパ化はあらためてここに指摘するまでもあるまい。一言にして尽せば、インドシナの文化的・地理的性格なるものは歴史的に形成せられ来たものであり、換言すれば、それは歴史的時代に応じて、いくたびか変遷してきたもの以外ならないのである。今日のインドシナは文化的社会的に独自の特色を有しつつ、しかもインドならびにシナ的な影響の色濃く、政治的・経済的なそれを別とすれば、右の特色は今後はなお当分の間、力強く継続し発展してゆくことで

あろう(4)。

半島部の歴史は、南方へ向かう最も屈強な諸民族の絶え間ない流出によって特徴づけられる。まさしく肥沃なデルタ地帯だけが、大国の創建に必要な資力を備えていた。それらはクメール人・ベトナム人・ビルマ人・シャム人の諸勢力や活躍(5)によっても理解される。

これら南方へ向って移動した集団の先陣は、考察の範囲では、扶南を崩壊させたクメールの勢力であった。九世紀には、ビルマ人がイラワヂ河に沿って南下し、一方ではベトナム人は、九三九年に中国から解き放され、アンナン(安南)の沿岸づたいに長い行進を開始する。また、八世紀には、インドシナ半島の中央部においてタイ系諸族が興ってきたが、そのうちシャム人だけが海までたどり着き、強力な国家を建設することになる。その時、彼らの系族の不運なラオ人およびシャン人は、山岳地帯にとどまってしまい、後背地にのみ小国を建てている(6)。

民族の移動は、自然条件の制約が大きいかわめて古い時代に多かったのであるから、一層地理的環境の影響を強く受け、そのうえ各民族の特徴や資質・先住・後来も関連し、沿岸とその平野・河川沿いの谷間・デルタ・盆地・山間の高地など複雑な移動による分布構成を示すようになったと理解すべきであろう。

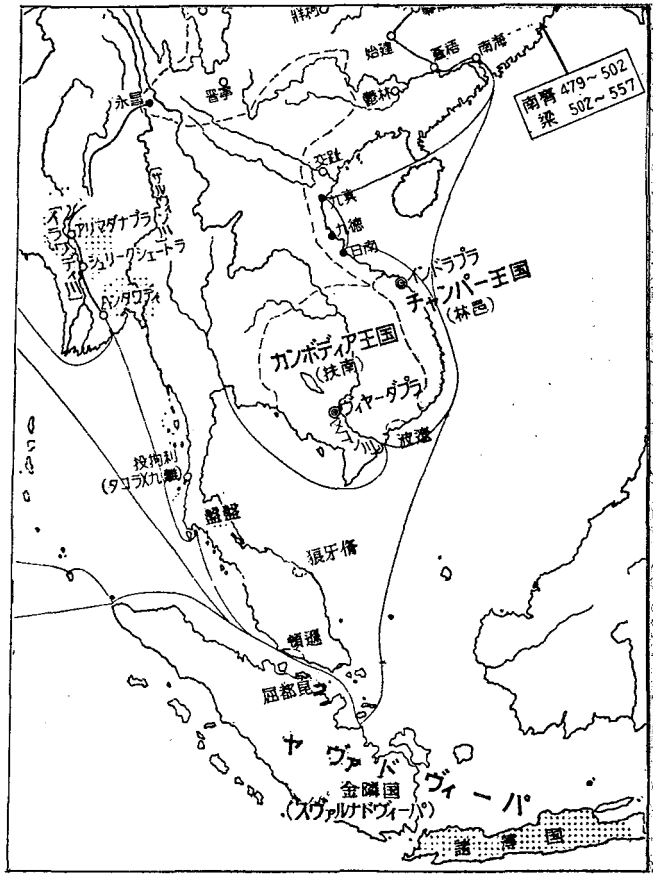
## 二 領域の形成過程

### (イ) フーナン(王朝)時代(一世紀〜六世紀)

フーナン王国(Funan・扶南)王国は、メコンデルタ平原を中心として君臨していた。シャム湾に面したその地の利により、そこはインドから中国への海路上の要衝に当たり、フーナンは富と国力を増大させていき、半島において

じていた。

しばらくの間、フーナン王国の首府はデルタの先端近くのヴィヤーダプラ(Vyadhapura「狩人の町」)にあった。それは、当時では海から約二〇マイルのところ、現在よりも四〇〜五〇マイルも海に近い位置であった。地理的な



5～6世紀の政治区分図

(松田寿男：アジア歴史地図 p.15 1966より所収)

特に卓越した地位になっていった。三世紀のシナ人の記録によると、その住民たちはすぐれた海の男たちであったとされ、ネシオト(Nesiot)種族民であったとも思われている。インドのブラーマン王子の子孫だと自称するフーナン王国の支配者は、「山の王さま」という帝国の称号をもっていたが、すでに中国に対して定期的に使節を送りは

位置とデルタの重要な農業源のおかげで、フーナン王国は沿岸地域の東と北の両方へ広がることができ、またさらにメコン流域をあげつて肥沃なカンボジア盆地へ、そこから更にメナム盆地へ進出することは比較的容易であった。このようにしてフーナン王国はそのうちシヤム湾のまわりに大きくなり一連の小国に君臨するようになった。この王国が最も栄えた五世紀にシバア (Siva) 派のヒンズー教は、マハヤマ (Mahayana) 仏教と相並んですっかりと確立しはじめた。その領域はチャンパ (Champa) 王国の境からマレー半島のび、インド洋に面した現在のテナッセルム (Tenasserim) まで及んだけれども、六世紀には、富の累積のもとで、この文化は衰え始め、フーナンは、国内各地の政権が分裂している中国との通商の減少によって弱体化し、メコン河中流に興った好戦的な民族クメールの攻勢に立ち向かうことができなかつた。フーナンは東南アジアの強国として五〇〇年にわたり君臨してきたが、七世紀には結局凋落してしまつたのである(8)。

(二) チェンラ (王朝) 時代 (六世紀〜八世紀)

六世紀にはフーナン (Funan) 王国の力が弱まり、その属国の一つであるチェンラ (Chenla) が反抗し、同王国を攻撃した。このチェンラはクメール族の王国で (カンブジャ・Kambuja) もともと中部メコンに沿うフーナン王国北方の内陸部を支配していた。チェンラ王国の人口がふえるにつれて、北から移住人が到来し、力のバランスがしだいにくずれて、六二七年頃にチェンラ王国はフーナン王国を打ち負かし、その後の文化の継承に成功した(9)。もともと南部のネシオト族以外クメール族を主とする扶南国が、クメール族であるチェンラに併合せられたものであるから、民族上に従来と大差はなく、大体においてこれは政治上の変動に過ぎなかつたのである(10)。

チェンラは、都をサンボル・プレイコック (Sambor Preikok) 現在のコンポントム州) においた。(カンブジャは

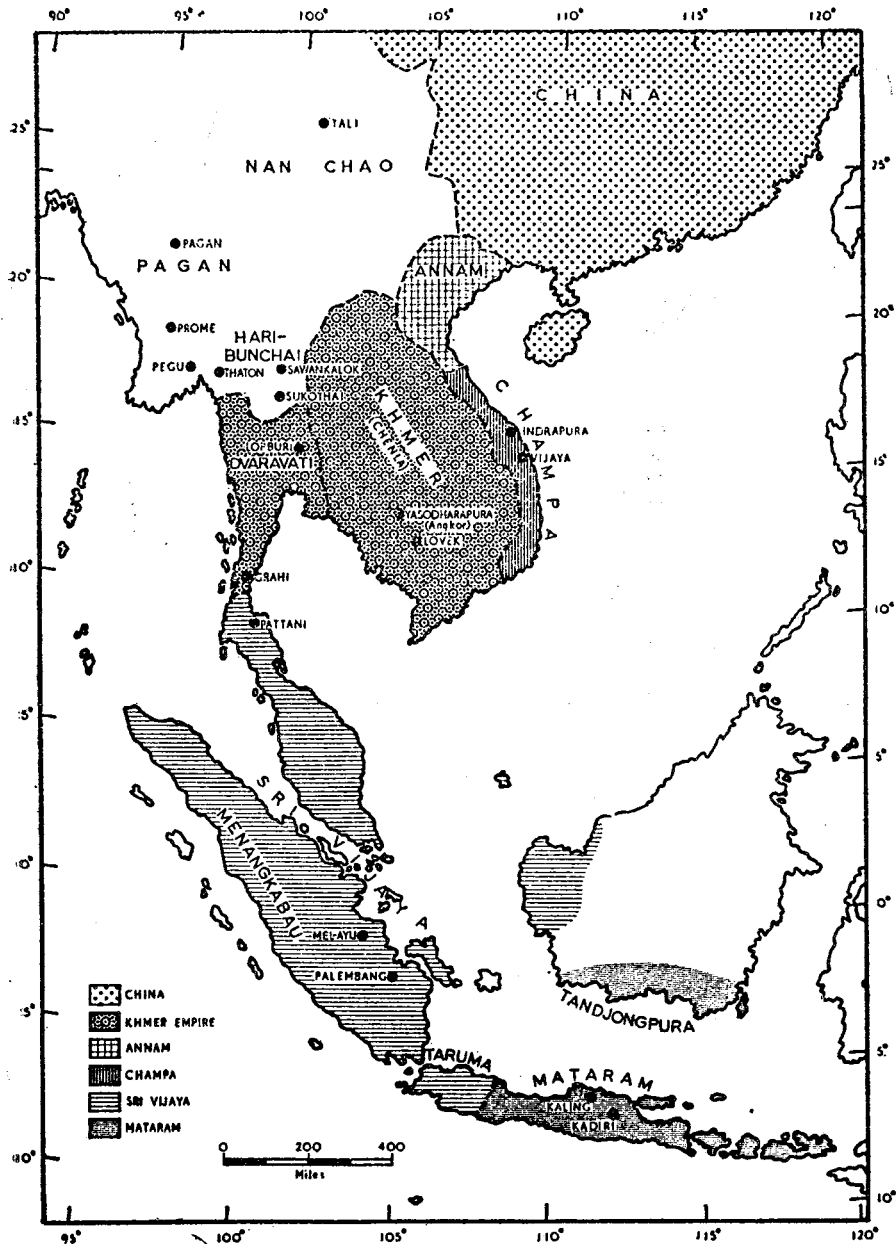
カンボジアの前身であるが、中国の史書に真臘(「Chenla」)と標記されたため、カンボジア史上、この時代のカンボジアをチェンラと称する)。チェンラはカンボジア全土を統一して、七世紀後半に都をアンコール・ボレイ(Angkor Borei・現在のタケオ州)においた。チェンラはやがて、北の「陸のチェンラ」(Land Chhla)と南の「水のチェンラ」に分裂して互に相争い、八世紀中ごろより、後者はさらに多数の国に分裂した。八世紀におけるチェンラの混乱した状態は、当時スマトラを中心に付近島しょを制覇していたジャバ王国の好餌となり、同世紀後半には約三〇年間ジャバの支配下におかれるにいたつたのである(11)。

(4) クメール(王朝)時代(九世紀～一五世紀)

フーナン王国は五〇〇年にして北方山地から再度南下して来たクメール人(Khmer)に征服された。クメール人は今日のカンボジア人(Cambodians)の主流となつた者である(12)。

このフーナン王国の主要都市地域を受け継いだチェンラ王国のクメール人は、コンポントム(Kompong Thom)の北方一二二マイルほどの内陸と考えられる場所に、新しい首府を建設した。そこは、トンレサップ(Tonle Sap)やメコン流域の低地付近を強国に支配する拠点となつた。七〇六年にチェンラ(Chenla)王国は、北部と南部とに分かれ混乱したが、幼少期をジャバに虜囚の身として送つたジャバルマン二世(Jaya Varman II)が、八〇二年にアンコール王朝を建設した後、二つのチェンラ王国はここに再び統一され、トンレサップ盆地を中心とした国家となつた。そこは豊かな経済力を提供できる漁業や低湿地の米の豊富な源であつたため、同王国は間もなく強大な国家となつた(13)。

湖の北方の先端近くに位した最初の王都アンコールは、九世紀末に建設され、その遺物や同時代の事柄から判断し



11世紀末の政治区分図

(Charles A. Fisher; South-East Asia p.111 1965より所収)



て、古代ローマよりも大きかったろうと判断される。その人口は一〇〇万人台であったというのは確かに誇張であるが、首都は豪華にすばらしいスケールで建設され、シムリアップ (Siemreap) 川の水路を変えたり、運河や貯水池の精巧なシステムを建設したりして用水の供給をはかるなど、熟練した技術者が手腕を振った<sup>(4)</sup>ことは容易に想像される。

一〇世紀にチャンパ国の征服により暫く途切れたことがあったが、それ以外はアンコールは一四三二年までクメール王国の首府となり、その間この王国はフーナン王国の領土的野望を十分によみがえらせた。カンボジア盆地は、自然によつて防禦されると同時に、メコン上流コラト (Korat) 高原・メナム盆地・南方と東方の沿岸地域などを容易に支配することができ、その経済資質と地理的条件とは、大きな資産であった。これらの地域を十分に開発したり、一一世紀後半の宗朝の弱みにつけこんだりして、クメール王国は、アンコールワットという壮麗な寺院の建設者、スーリヤバルマン (Suryavarman II) のもとで、その繁栄の頂点に達した。

クメールの領域は、北方ではシナの領域と境を接し、一方東方では一二世紀の後半一時完全に征服されたチャンパ王国と境を接するようになっていた。しかし、この王国の最もすばらしい獲得物は、西方の国境地帯において一〇世紀と一二世紀の間にドバラバチイ (Dvaravati) のモン (Mon) 王国の領土を征服したことであった。このようにクメールは、北西のサワンカローク (Sawankalok) ・スコータイ (Sukothai) から、テナセリム (Tenasserim) の沿岸まで、さらに現在のパッタニイ (Pattani) の北方にあるグラニイ (Grani) に至るシヤム半島の首の部分にまで支配力を拡張した。これらの地域は当時スーリビジャヤ (Sri Vijaya) 王国の属領地だったので、東部アジアで大陸にできた一つの帝国、と半島西方の水路を基盤にした別の帝国との二つの大きな帝国が、マレー半島の北端に沿っ

て接していたものと考えられる(16)。

一方一七七年には、中部ベトナムに強大な王国を建て、付近に勢力を伸長していたチャム(Cham)人のチャンパ国により、海路から攻撃され、アンコールは征服されたが、クメールは、ジャバルマン七世(Jayavarman VII)のもとで著しく復興した。すなわち、同王は首都を復興し、後にその名称もアンコール・トム(Angkor Thom)と変え、首都を中心に各方面へ伸びる印象的な道路システムを建設した。実際、外観上クメール王国は、それから二〇〇年間栄華をきわめ、そのすばらしい伝説的な事柄は、一三世紀末のモンゴル王朝の外交使節の一員であったチュタクワン(Chou Ta-Kuan)によって伝えられた。

しかし、国王の死後は、たびかさなる出兵と相次ぐ大規模な建設工事によってクメールの国力は疲弊し、これに反し中国の雲南省方面から南下してきたタイ族の王国シャムが強大になるにおよび、クメールは外敵による侵略の脅威にさらされ、アンコールの都が二度にわたり一時的にシャムに占領されたのち、ついに一四四〇年、クメールはアンコールの都を放棄し、没落していった(16)。

#### (四) チャンパ(王朝)時代(二世紀～一五世紀)

扶南の東では、チャンパが一五世紀まで存続する。その中心勢力であるリンイ(林邑)が、一九二年に現在のフェエ(ユエ)地方に興ってくる。中国の後退に乗じて、その土着の首長クレン(区連)が、漢帝国の南部領域に侵寇したのは、この時代である。この国は、安南の狭い海岸平野に当たる地味のやせた地域にあって、漢勢力の没落による分裂を利用して北上しようとした。そのためニャットナム(タンホア)や北部地域(トンキン)などの肥沃なシシ(刺史)の領地にくり返し攻撃を加えていた。王のファンブン(范文)は、王宮・城壁・壕の構築および軍事や軍備に関

して中国の技法をとり入れた。三四七年に、王は中国軍を打ち破り、商船・ジャンクの集合地であるホアソン（ポルト・ダーナン）近辺に北境を画した。

この国の隆盛は、何よりも通商活動を基盤としている。七世紀以後、唐朝による中国の統一および小アジアやインドにおけるイスラムの発展は、この二大帝国の自由な政策に助長されて、経済交流の再開をもたらした。広東とマライの諸海峡との中間に位置するチャム族は、中国・ドラヴィダ系のインド・バグダットのアッパース朝との間に立って、香料・絹布・象牙・香木などの取り引きに従事してきた。八七五年には、インドラプラに「白蓮の輝き」をもつた新王朝が出現する。そして大乘仏教の存在が、ドンドウオン寺院によりはじめて実証されてはいるが、チャム芸術は軽妙な壁柱や踊るアプサラを飾ったミソンの寺院群によって、絶頂期を迎えている(17)。

ベトナム朝廷は、チャンパのたえまない侵入をうけていたので、最後の打撃を与えることに決定し、一四七一年（黎）朝の第四代聖宗は、大軍をひきいてピイジャヤを占拠して、チャンパ王を捕虜とした。

この王国は、いつも地理上の形勢が不利であった。この国は、安南山脈の支脈によって仕切られた狭い海岸地帯の平野部に誕生したが、近隣諸国のように、メコン河もしくはソソコイ（紅河）河の肥沃な水田地域を持つてはいなかった。そんなわけで、経済基盤および人口という古代国家にとって重要な力となるものを持たなかった。チャム族が灌漑農耕を知っていたとはいえ、北部のベトナム定住民からの絶え間ない圧迫に持ちこたえるすべを知らなかったのは、とりもなおさず海洋民族であったからにはかならない。

のちにチャンパ王国の残骸は、ビアレア（Vae Ila・バレラ）岬以南の地に余喘を保つにすぎず、結局はアンナンの勢力の中に包含されて、一五世紀にはその姿を消したのである(18)。

(四) アンナン(王朝)時代(一〇世紀～一八世紀)

中国の揚子江以南の沿海地方に古く住んでいたベトナム族の一部が、紀元前一五五年にベトナム史上最初の国家として、アウラック(甌貉)国を創建した<sup>19</sup>。しかし、その頃から中国人の統治下で搾取されていたのである。金属農具の普及などにより生産力を向上し、それが住民に強い独立心を起さしめ、土侯たちは中国にくり返し反抗を重ねていた。四〇年にはチュンチャク(徵側)・チュンニ(徵戒)姉妹、二四八年にチュウオー(趙嫗)、五四四年のリンボン(李贲)から七九一年のホンフン(馮興)まで反乱があったが、これら反乱のどれもが数年間しか持続しなかった。しかし、唐帝国の没落が事態を全く一変させる口火となった。成熟したこの国は蜂起して、中国人長官を追放し、そして、ゴクエン(呉権)が九三九年にベトナム人の国家を創建したのである<sup>20</sup>。

元来アンナン(安南)の名称が使われるのは、中国がその南方を平定したという意味で、唐朝以後からである。(ハノイには、唐の安南都護府を置いた)それだけに、中国の支配階級のイデオロギーとしての儒教・そして・道教・仏教(大乘)・学術・文学・技芸・官吏登用の方法習慣などまでがもちこまれ、「中国に従属する国家となったベトナム」の政治・経済・社会制度の基礎が、中国の圧倒的な影響のもとに形成されていった。

しかし、前述のとおり、ゴクエンが中国の南漢の軍隊を撃破し、長期にわたるベトナム独立の時代をきりひらいたのである。ゴ(呉)朝は、いわゆるアンナン歴代王朝の始祖にあたる。ゴクエンの死後、ベトナム国内は分立・抗争の状態がしばらくつづくが、リ(李)朝の大祖リ・コン・ウアンは、首都をタンロン(いまのハノイ)に定め、国号をダイベト(大越)とあらためた。このリ朝(一〇〇九～一二二五年)と、これにつづくチャン(陳)朝(一二二五～一四〇〇年)がベトナム封建史上もっとも栄えた時代であった。

リ朝の一〇七五年には、中国の宋軍の侵入を撃退し、チャン朝は三度にわたってモンゴルの侵略を撃破・撃退した。第一回は一二五七年、第二回は一二八四年、第三回は一二八八年である。とくに第二回目の来襲のとき、「チャン・フンダオ将軍が、チンギス汗（ジンギスカン）の孫トーハンのひきいる六〇万のモンゴル軍を奇計を用いてうち破ったことは、いまもベトナム人の間に語り草となっている(20)。

そうした状況の上で文化が開化しはじめた。その後明軍により国土は一時占領されたが、やがてタンホア省出身のレ（黎）朝が出現して、一四二八年から一八世紀末まで後黎期を創建し、（都をドンキン〈東京・Dony Kinh〉と称した。紅河流域を今日トンキン地方と呼ぶのはこれに始まっている。その勢は南のチャンパを征服した。当時帝国の極南はユエ・クワンナムであった。この間ベトナムの中央集権化はますます進み、黎氏の時代は一五世紀末の黎聖宗のときに最盛期に達した。

しかし、一六世紀になると黎朝廢位問題からんで実権はチン（Trinh・鄭）氏に移り、さらにその争いは鄭氏とグエン（阮）氏間に持ちこまれて、国内分裂（一七世紀の初めから一八世紀末まで）が近づいた。そして、ハノイによった鄭氏に対抗して、中部アンナンのユエによった阮氏は、しきりに領土を南に広げ、チャンパを滅して当時のクメール王国領であったメコン河デルタ地帯にまで進出した。かくしてアンナン帝国は、しだいに南部にその勢力を拡張してくるようになったのである(21)。

アンナンは、建国当初から人口増加のもとで、北方にはシナの邪魔があり、西方には、熱病の多い高地が邪魔していたので、最も抵抗の少ない南方へと領土拡張を狙ったのである(22)。

この間中部アンナン、キノン（Qui Nhon・クイニョン）近くのタンソン（Tay Son・西山）村に起った一揆は、

今一人の阮氏（阮文岳）を首領として阮氏および鄭氏を滅ぼし、キノンに拠って帝を称したが、先の阮氏の一族で難を免れた福映は、折から到来したフランス人宣教師の助力を得て、一八〇二年タンソンの阮氏を打倒して、ユエを都とし、この地域を統一、国をベトナム（越南）と称した。ベトナムの称はここに始まったのである<sup>(25)</sup>。

ベトナムの北部は、古く中国の勢力圏内にあつたが、二世紀頃からベトナムにも独立心が生じ、中国にくり返し反抗を重ねてきた。中国勢力の増大した時には侵入されていたが、それが弱まった時には独立し、その領域の拡大をも計っていた。この傾向は一一世紀まで続いている。その後、一応の独自性を保持しながら、一七世紀にフランスが進出するまで、内部分裂をおこしている。これらも地域的統一性に欠けている点である。

#### 丙 チェンセン時代

タイ人はもともと南西中国に発生した民族で、西暦紀元のはじまる頃に徐々に南方へ移住してき、アッサム地方ではアホム (Ahom) 族として知られ、ビルマでシャン (Shan) 族、インドシナではラオ (Lao) 族、タイ国ではシャム (Shamese) 族として知られるのは、みな同族源の人達なのである<sup>(26)</sup>。

現代タイ国民の核心をなした部族の一つが雲南・ラオス方面からメコン川に沿う段丘上に定着したのは、紀元九世紀ごろと称されている。チェンライ・チェンマイといった北タイの町々に、水濠と土壁の都城遺跡をもっていることと共に、チェンセン時代を現出したタイ民族の特異な文化は、すでに北タイに起っているのである。このチェンセン時代を培ったタイ人はやがて南下の道をたどることになったとされている<sup>(26)</sup>。

#### 乙 スコータイ (王朝) 時代 (一三三八～一三四九年)

スコータイ時代にはじめてタイが一つの民族のもとに独立したと言われ、生産力のある北部平野を中心にしてその

勢力を増強しつつ、中央平野地域を占居した主要民族であったのである。一六世紀なかばで、当時隣国カンボジアに繁栄をきわめていたクメール王国の文化を吸収し、インド文化の影響をうけた。スコータイ王朝第三代のラームカムヘーン大帝は、「タイ史空前の戦士」といわれただけに、その領土を大いに広げ、文化的にもタイ文字を改良するなど多くの功績をあげた。一四世紀に入ってから、スコータイ王朝は急激に衰え<sup>(28)</sup>、王朝は約一〇〇年続いた程度である。

#### (ウ) アユタヤ(王朝)時代(一三五〇～一七六七年)

一四世紀の中ごろ急激に衰えたスコータイ王朝を併合して、一三五〇年に平野部の中心にアユタヤ王朝が建設されるに至った。これより三五代、四一七年以上も王朝が持続し、その間カンボジアを征服し、政治的にも文化的にも発展した。しかし、インド化されたアユタヤ王朝のタイ人は低地帯を中心に肥沃な平野に培われた壮大な文化と富のもとで発展したが北部高原地帯との対立が強まり、北部勢力の結集であるビルマ軍と対抗が続き、一四か月もビルマ軍に包囲たされたのち、一七六七年ついにアユタヤは滅びた。ビルマのシャン族は北タイから東部タイのコラート高原よりラオス高原に至るまで、その勢力をのびしたのである<sup>(28)</sup>。

#### (エ) トンブリルバンコク時代(一七六八～一七八一、一七八二～現在)

その後、アユタヤ王朝の武將の一人、プラヤ・タクシンがビルマ軍を撃退し、トンブリを都として自から王位についた。一七八二年頃には、その領土は旧アユタヤ王国のときよりさらに拡大され、コラート高原やピエンチャンを占領したのである。しかし、王の晩年反王運動がおこり、トンブリの都はわずか一〇数年の短期間にすぎなかった。プラヤ・タクシン王はその侍臣チャプラ・ジャクリーに殺害され、代ってジャクリーが王位につくとともに、都をバン





コクに遷し、ラーマ一世と称し、これが（現チャクリー王朝の始祖）タイ人の新しい国家を建設することになったのである<sup>(29)</sup>。

(2) ランチャン(王朝)時代(一三五三〜一八二七年)

半島部への民族移動で最も大量に移住したのはタイ・ラオ・シャン人で、雲南高原から南方へ流れる大きな河川の流域沿いにすさまじい勢いで南下して来た。

東方では、ラオ族がメコン河流域を一一世紀に下ってきたために、現在のラオス地域に一連の小国家が発生する結果となった。一三五三年にこれらの国は、ファ・グン (Fa Ngoun) という首長のもとに統合されて、ランチャン (Lan Chang) 王国と呼ばれた。その首都はのちにルアン普拉バン (Luan Prabang) と呼ばれるに至った。クメール王国の勢力が中部メコン盆地やコラート (Korat) 高原から後退するにつれて、ランチャン王国はこの地域に広く君臨して行った。一時、同王国は半島で最も大きな国の一つにランクされたが、農業資源が乏しかったので、人口は決して多くはならなかった<sup>(30)</sup>。

ファ・グンは晩年暴君となって王位を追われ(一三九三年)、その王子が即位した。この時代がランチャン王国の黄金時代といわれる。その後、ベトナムによるムオン・スワー(ルアン普拉バン)の攻略(一四七七年)、タイとの戦争(一五三六年)、ビエンチャンへの遷都、ビルマの侵略(一五六三〜九一年)などの諸事件を経て、ランチャン王国は英君サウリナ・ボンサ (Souigna Vongsa) を迎えたが(一六三七〜九四年)<sup>(31)</sup>、一七〇〇年に王の死後王位継承の混乱にベトナムが進出し、その一部にベトナムの宗主権をもたらした<sup>(32)</sup>。

その後、ランチャン王国は、ベトナムの擁立したビエンチャン王朝と、タイに傾くチャンバサクク王朝と、ルアン

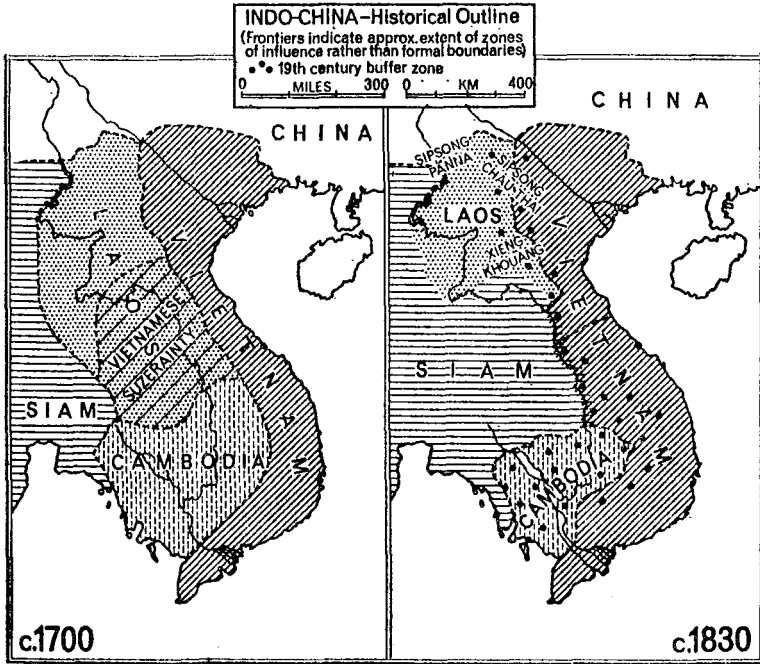
プーバン王朝の三王朝に分裂した<sup>(33)</sup>。

これら三国は、互いに抗争をやめず、それぞれが他の国を征討しようとして、外国に支援を求めた。彼らの衰微は、シャムの領土拡張に好都合であった。チャンパサック国が、まず最初に姿を消し、ビエンチャンも一七七八年に降伏する。チャオ・アナ王がビエンチャンを解放するが、一八二七年に首都に再びふみにじられ、徹底的に破壊されてしまう。数千人の住民がシャム東北部に連れ去られた。ランチャン国は現在のラオス国で、その統一を再度達成するには一九四六年まで待つことになる<sup>(34)</sup>。

### 三 一九世紀当時の情勢

ベトナムでは、阮 (Nguyễn) 朝時代、阮福映は嘉隆帝 (Gia Long・一八〇二) と称し、国名をベトナム (越南) とした。ジャロン帝はフランス軍などの援助を得て、サイゴン・ユエ・ハノイを陥れてベトナム史上初めて中国からカンボジアにいたる全ベトナムを統一し、安南王国を宣した (一八〇六年)。また、国内を三分し、中部のアンナン地方は皇帝の直轄とし、北部のトンキン、南部のコーチシナは経略 (Kinh Luoc) 副王に治めさせた。ジャロン帝は、国内の秩序を回復し、中国との善隣友好に努めたほか、フランス人や宣教師を優遇した。しかし、つぎのミン (Minh Mang・明命・一八二〇) 帝、チウチ (Thieu Tri・紹治・一八四一) 帝、トゥドック (Tu Duc・嗣徳・一八四八) 帝は、いずれもキリスト教を弾圧し鎖国排外政策をとり、それがかえってフランスに乗ぜられる結果となつた<sup>(35)</sup>。

タイでは、一七五九年にビルマと戦争が起り、八年後にアユタヤ王朝の栄都も陥落した。しかし、タイはその独立



インドシナの歴史的概観図

(Hugh Toye; Laos, Buffer State or Battle Ground,  
London Oxford University Press p.17 1968所収)

回復に長くかからなかった。ビルマ主力軍の撤退後、首都陥落前にタイ湾東海岸のラヨン (Rayong) に拠っていた勇将 プラヤー・タクシン (Prya Taksin) は、残存兵力を結集してトンブリー (Thon-buri) を攻略し、ついでビルマ守備隊を撃破し、僅か六か月後に独立を回復し国名を名のつた。彼の治世の終り (一七八二) には旧アナタヤ王国の領土のみだけでなく、現北タイおよびインドシナ北部地方の一部をもその宗主権下に置いた。プラヤー・タクシンに代って武将チャオ・プラヤー・チャクリー (Chao pryachakri) が一七八二年に即位し、対岸バンコクに遷都し、ラーマ一世プラプッタ・ヨートファー・チュラローク (Purathathayot Fa Chulalongkorn) と称し、

現チャクラー王朝の始祖となった(36)。

ラオスでは、一四世紀中葉にファ・ゲーム (Fa Ngum) 王は、ベトナム・タイを攻め、ランチャン王国はインドシナ半島における最強国となったが、これを頂点として国運は下り坂になった。一五世紀の中葉にはベトナム人の反撃を受け、シエンクワン・ルアンブラバンを占領された。ついでビルマの攻撃を受けて、ランサン王国は崩壊するにいたり、小さな土侯国が割拠する状況に陥った。そのなかではルアンブラバン王国が最も強力であったが、一九世紀末、東進したタイによってこれら土侯国は漸次その支配下に置かれ、ルアンブラバン王国もまたタイの保護下に置かれることになった。このように、ラオス人は人種的にはタイ人と同一種族である。したがって、ラオス地方がタイの勢力下にあることは自然の形であったが、一八六三年にカンボジアを、一八八四年ベトナムを征服したフランスは、今度はラオス地方の存在に目をつけるにおよび、ラオスをめぐるフランスとタイとの覇権争いがはじまった。しかし、結局タイは一八九三年一〇月三日、バンコク条約でラオス地方に対する宗主権を放棄するに至った(37)。

カンボジアでは、一七九六年アン・エン (Ang Eng) 王が没したときとは、王子アン・チャン (Ang Chan) は僅か四才であったので、摂政の制度が設けられた。一八〇六年国王が成年に達すると、戴冠式のためアン・チャン王はバンコクに行った。翌一八〇七年アン・チャン王はベトナムの統一に成功したチャロン帝に毎年、象牙・象牙・白豆などの貢物を献上することを約束した。かくて、カンボジアはタイ・ベトナム兩國に対する入貢国となった。のち同国王を支持するベトナムと、王弟を支持するタイとの間に紛争が生じたが、一八一三年に和議が成立、タイはカンボジアに対するベトナムの保護権を認めた(38)。

一八三四年にアン・チャン王が没するとベトナムは王女アン・メイを王位につけた。一方カンボジア駐在のベトナム

ム人將軍は、カンボジアのベトナム化に乗りだした。役人たちはベトナム服を着用し、髪を結わねばならなかった。また、ベトナム式の大乗仏教への帰依が強制され、地方のカンボジア人は強制労役に服せられた。このため国民の不満がしだいに高まってきたので、王弟アン・デュオンはバンコクに行き救援を乞うた。タイ政府はボダン將軍のひきいる軍隊をデュオンに与えた。デュオンはベトナム軍を破って一八四一年に王位についた<sup>(39)</sup>。緩衝地帯の性格がここにも現われていることが理解されるのである。

その後一八四七年にベトナムとタイの間で和議が成立し、ベトナムはカンボジアから軍隊を引揚げた。その代りベトナムは、カンボジアからジャディン (Gia dinh) ・ チョドック (Chau doc) の二州を割譲され、一方、タイはバツタンバン (Botambang) ・ シムンラップ (Siemreap) の二州をカンボジアから獲得した<sup>(40)</sup>。

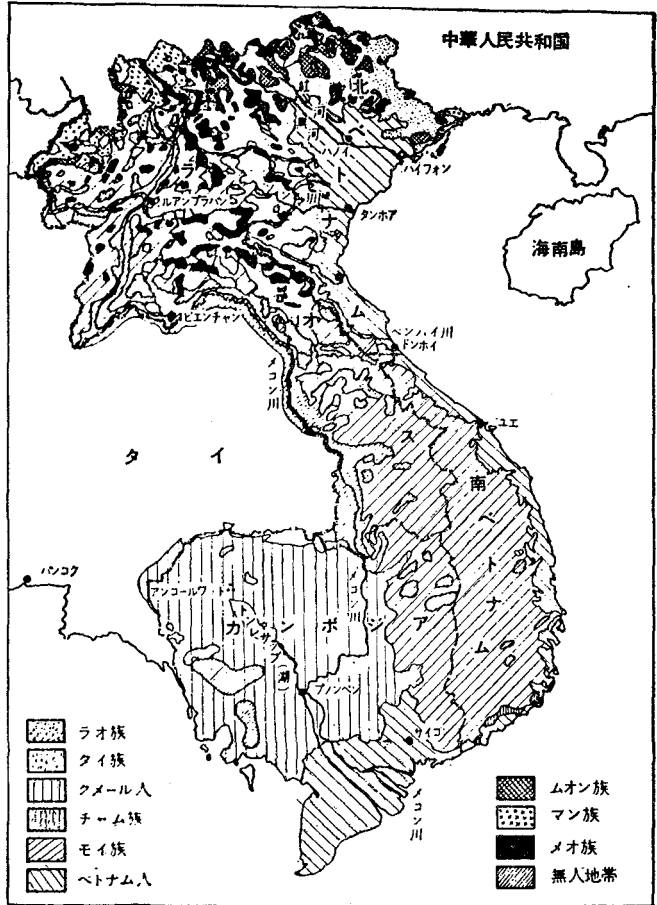
一八〇〇年の中葉、西欧諸国家のうちで、インドシナ半島に進出できたのはフランスが主であった。フランス領コーチシナの初期は、歴史上では「提督たちの時代」の名でよばれる。一八六二年から七九年まで、同植民地が総督兼任の提督たちに管理がゆだねられたからである。そのうちもっとも高名なのはド・ラ・グランディエール提督で、彼は一八六三年から六八年にかけて、この生まれつつある植民地に自己のエネルギーを注ぎこみ、最終的に国境を画定した。ド・ラ・グランディエール提督のおかげで、フランスの栄光はコーチシナの外にも輝きわたった。一八六三年にカンボジア保護国を確立できたのも、彼あればこそであった。フランスはコーチシナとカンボジアを獲得したが、それは、このうえなくすばらしい活動舞台を手に入れたことを意味する。この地はインドシナのなかでもっとも豊かでもっとも人口が少なく、ただちに大きな経済的収益をあげうる唯一の国であった。さらに当時メコン河調査を実施し、南シナにはいる最上の道であると考えて行ったが、メコン河中流が「コーンの滝・Khone」で中断されているこ

とがわかると、その計画を変更し、トンキンの紅河に注目してトンキン地方に鋒先を転じた。そして一八七四年には、トンキンとアンナンをも保護領とした。かくして、ベトナム・カンボジアの全土はフランスの勢力圏となり、コーチナはいわゆる植民地であり、トンキンとアンナンおよびカンボジアは保護国となったが、実質的には大差はなかった(4)。

フランスは、カンボジア・ベトナムを支配下におき、つぎにラオスに着目してきたため、ラオスにおいてタイ・フランスの両国勢力が衝突することとなった。フランスは、一八八五年タイの同意を得てルアンプラバンに領事館を開設し、一八九三年五月には武力をもってメコン河の東岸を占領した。このころビルマを征服した英国とフランスの間には、メナム河流域をもって両国の緩衝地帯とする了解が成立しつつあったため、タイはフランスの要求のみ、同年一〇月の条約でメコン河東岸に対するいっさいの権利を放棄した。フランスは、一八九九年ラオスをインドシナ連邦(一八八七年に発足)に編入した。この後一九〇七年の仏・タイ条約によって、タイはメコン河西岸のサヤブリとチャンパサックを手離し、現在のラオスの国境ができあつたのである(5)。

インドシナ半島のアンナン山脈西部における領域の形成を略述すれば、その初期には、ネシオト族によるフーナン王国で、つぎにクメール族によるチェンラヤクメール王国となった。その後タイ系諸族の南下により、チェン・センスコータイ・アユタヤ・トンブリ・バンコクの各国家形成となり、また、同種族のラオ族によりランチャン王国が建設されたのである。同じく東部では、チャム族によりチャンパ王国が成立し、それを北から圧迫したベト族(アンナン族)が、アンナン王国を建設し、各々その領域の形成がなされて来た流動性が理解される。この地域では、国名や民族の名称が、地域により、また年代差により同一のものであっても呼称を異にしている事実を見ても、地域的錯雑

島南部に広がり、インドの文物および制度を取り入れて発展し、強大なクメール帝国を築き上げた。現在ではカンボジアに約五三〇万人居住しているほか、タイ南部およびベトナム南部にかなり多数居住している。身体的特徴およびその起源から、人類学上はビルマ南部のモン族とともにモン・クメール (Mon-Khmer) 族としてのカテゴリーに入



ラオス・カンボジア・ベトナム地域の民族分布図  
(インドシナ半島；世界地理風俗大系第8巻 p.193  
1966より所収)

性を物語っているの  
である。

#### 四 種族の特徴と

##### 現代的意義

クメール (Khmer) 族は、いわゆるカンボジア人である。クメール族の発祥の地はタイのコラート高原付近であるといわれるが不明確である。いずれにせよ、一世紀ごろから急速にインドシナ半

れられる(43)。

このクメール族も、年とともに支那人・タイ人・安南人などがカンボジアに侵入するようになってからは全く混血してしまい、純粹のクメール人はきわめて少ないとされている。彼らは、印度文化の影響を受け、宗教は仏教を信じ、慈悲心が深く、清潔を好み、忍耐力があり(44)、篤実・正直・温厚であるが、無口・無気力で軽卒な面があり、気まぐれでもある。したがって諦観主義者、運命論者が多く、決断力に乏しいとされている(45)。早婚・蓄妾の習慣があり、生活程度は低く、米を主食とし、殊にバナナを飽食すると言われている。

チャム (Cham) 族は、マレー系のインドネシア族で、西暦一九二二ころよりチャンパ (占城) 王国をつくり、かつて現在のベトナムにあたる東部沿岸地方に君臨した民族で、インド文化の影響をうけていた。現在主に南ベトナムの東南部山中に約一万七〇〇〇人程度居住していると言われる。体格はアンナン人やカンボジア人よりも丈が高く、容貌はインド人に似ており、バラモン教・仏教を信じ、きわめて少数のカソリック教徒もいる(46)。

アンナン (Annamese) ベトナム族は、その祖先がどこから来たかは分明ではないが、おそらく揚子江の南、浙江省の北部あたりからベト族がトンキン地方に移住してきたものとされている。一見中国人や日本人と区別しにくく、体格は概して悪く、生活は質素で、忍耐強く、勤勉かつ貯蓄心があり、殊に兵士としてアンナン人は軍の中堅をなしており、良く苦闘に耐える。仏教を信じているが、熱帯民族の通弊として、賭博に耽り、反抗心強く、阿片を喫用する者も多い(47)。この民族は、一説によると三世紀頃トンキン地方に移住し、先住民族のモイ族を山地に追いあげ、南下してチャム族を破り、その領域を広めたが、その間にも、モイ族・漢族・チャム族などと混血していったと言われる(48)。六〇〇万人以上に達するとされ、インドシナにおいて最もその数も多い民族である。



アンナン人の勇氣と忍耐力というすぐれた特質は、人間に対する自然環境の影響に求められる。トンキン地方の農民は、あまり当てにならぬ堤防の庇護のもとに、古来よりきびしい生活を送ってきたのである。この民族をきたえあげてきたのは、トンキンデルタ地帯であつて、デルタ地帯における洪水との戦いは、常に彼らの死活問題に連なつており<sup>(49)</sup>、河が勝つか、人間が勝つかの競争にさらされ、その民族性ができたものとされている。

タイ (T'ai) 族は、インドシナ半島の広大な地域に広く分布している。タイ系諸族は、中国の西南部が發祥地で、西曆紀元のはじまる頃に南下し、所によりアホム・シャン・ラオ・シャムなどと称されるが同族源である。戦乱に敗れてメコン河辺に逃げ込んだのがラオス人で、メナム河辺に逃げ込んだのがタイ人であると言われている。したがつて前者を老タイ、あるいは大タイと呼び、後者を小タイあるいは新タイと呼ぶこともある。タイ族は、八世紀の頃には全盛をきわめ、その分布地域は、ビルマの北境にも達していた。現在その数は約一四〇〇万人以上と推定される。その性質は温順、社交性に富み、舞踊を好む、男子が怠り女子は稼ぐ、かけごとに強く、ぜい弱さ・遲鈍さ・無氣力の面<sup>(50)</sup>もあるとされているが、タイ国民はそれ程でもなさそうである。

ラオ (Lao) 族は、元来ラワー族が居住していた地域に流入したので、シャム人が命名したもので、それ自体はタイ族である<sup>(51)</sup>。深く仏教を信じ、銀細工や繡刺の技に長じ、絵画も良くする。色は普通のタイ人より白いが、一見区別がつかない。白色の点は氣候の関係らしい、性質は温順で、社交性に富むが<sup>(52)</sup>、無氣力な面があり、アヘンなどの愛好者も多いと言われる。

メオ (Meo or Meao・苗) 族は、古くは揚子江以北の漢民族と闘争して追放されて南下し、その間彼らは無数の小部分に分かれた。現在の居住地域は、中国の南西諸省からインドシナの北部山地、海南島にわたっている。その数

は中国に二五〇万以上・トンキン地方に八万五〇〇〇人・ラオに五万人・そのほかタイ・ビルマに数千人居住していると称される。メオ族の言語は統一性に欠け、多くの方言に分れるとともに外来語の要素も多くみられる。したがって、モン・クメール語族とも、シャン語族とも、独立語族とも言われる諸説がある。宗教や伝説には中国文化の影響もあるが、洪水伝説には東南アジア的要素もある。

彼らは高さ九〇〇—一〇〇〇メートル以上の山岳地帯に住み、峰伝いに移動し、焼畑耕作を行ない、小麦・とうもろこし・そばを主食とし<sup>53</sup>、自給経済を営んでいる。性質は、快活で、愛想もよいが、剛勇に富み、最も精悍である<sup>54</sup>。

モイ (Moi) 族は、インドシナ半島ベトナム山脈を中心として、南北に広く居住するインドネシアの体質の原住民 (プロト・インドネシア系先住民、ラオス語でカー、カンボジア語でプノンと称される) で、身長は一、六メートルほど、かつてはトンキン地方の先住民族で、皮膚はクリ色である。男はフンドシ、女は腰巻一つで平常は半裸体、耳輪その他装身具をつけている。言語はモン・クメール語系の言葉を使用しているが、いろいろな分派がある。その数は一〇〇万人余、火田耕作で米またはとうもろこしを栽培し、また、ある者は水田耕作を営んでおり、まだ未研究の種族である。生活は原始的であり、好戦的で、体格は剛健、毒矢を放って野獣を射斃し、その肉を食う性習もある強暴な蛮族である。

ムオン族は、トンキンとアンナンの山地中比較的低い所に住み、外観はアンナン人に似ており、祖先はチベット人であって、蒙古系の血を多分に有し、農業を行なっている。ムオン族は、仏印諸族中最も御し難い民族とされ、盜癖があり、人をいつわり、多くを貪る通弊がある<sup>55</sup>。その数約三〇万人とされている。

マン(ヤオ・ヤオ)族は、トンキンおよびラオスの高原に住む蒙古系半開の一小族であつて、文字もなく、狩猟を行ない、一定の場所に永住せず、きわめて簡単な家屋に住み、中には穴居生活するものもあり、方言中にはシナ語が混用され、その数約八万以上とされている。ロロ(Lolo)族も、森林焼畑農民で自給的・封鎖的である(56)。

一般にインドシナ地域において、山地に居住する民族は、後期に渡来した民族のため山地に追いこまれた原住民とばかりは限らぬことである。たとえば、メオ・ヤオ・ロロ族などの中国南部よりの移住は、ごく最近の世紀におこり、そして今なお継統中である。彼らがあえて高地を選んで居住するのは、一面平地がすでに先住民族により占居されているからでもあるが、他方、彼らの焼畑耕作が山地をむしろ適地とし、また先住地のそれと類似した冷涼な氣候に執着して離脱し難いからであると言われ(57)、シャンヤカレン族なども同様にみなされている。

インドシナは、河川や山脈により区分され、河川の上・下流との間、および流域相互の間の交通は比較的困難である。したがつて、インドシナは幾つかに区割せられた地域に分たれ、その住民の文化も居住地域を異にするにつれて、変化して統一がない。各地域は、それぞれ独自の文化発達を遂げた。しかし、反面隣接大国の文化の影響を蒙ること多く、その中でも西部および西南部地方には、印度文明の影響顕著であり、東方にはシナ文明の勢力強く、二大文明の延長地域としての観がある。かくして、インドシナ全体を通じて統一した民族はなく、文化もないことは、その国土の一貫した通史を知ろうとするものに大きな困難を覚えさせると同時に、統一された国家建設の困難性を知ることができぬ。

この半島にかつて栄えたチャンパやクメールの衰微の跡をたどる時、われわれは、風土の影響がその没落史に重大な役割を演じたことを推定せざるを得ない。高尚である心的能力を鈍くし、勤勉な労作を困難ならしめる熱帯的氣候

こそ、かつて活躍したこれら民族を怠惰柔弱化し、南下したアンナンやタイやビルマの諸民族の前に屈した有力な原囚であつたであろう。

更に史前に遡つたなら、こういう亡びた諸民族も、かつてはこの国土に新たに渡来した新鋭種族であり、前住民族を征服して建国したものであつたかもしれない。悠久の古からこのインドシナ半島には、幾度か人種闘争の歴史が繰返され、その中でも北より南に下ってくる民族の波が殊に強大であり、温帯や寒帯地方で養われた健やかな文化に育くまれた新来民族が、南方の萎靡沈滞した前住民族を征服して、新文化をインドシナに生み出すような事が、幾度となくこの国土の上で繰返(88)されたことを想像することができる。

現在でも全般を通じて、平野部の暑い地域の住民であるタイ・カンボジア・ラオス・ベトナム人などは、温和であり無気力、しかも怠惰柔弱化が比較的強い者が多いが、冷涼な北部や高地の住民であるマン・モイ・ムオン・メオ族などの山地民族は、自然との戦いなどから、しだいに鍛え上げられ、勇氣と忍耐力とにすぐれた特質を授けて来た。たとえば、モイ族は狂暴性があり、好戦的である。また、メオ族は最も精悍剛勇である。したがって、メオ族は現在兵士として戦略の一環に組み入れられて活躍し、その価値が認められている。同じベトナム人でもトンキン地方とコーチナ地方とでは差異が認められ、南部は長い間に混血が多かつたとしても、そればかりでなく、自然環境から来る民族資質の南北差は認めなければならない。

民族の移動方向は古い時代から続いている。そしてアンナン山系を境に、東方の太平洋岸ベトナム人住地は、中国文化圏に入り、西南方向はインド文化圏に分類されるが(89)、あたかも一九世紀初期のベトナムとタイの緩衝地域であつたラオス・カンボジアが両文化圏の中間地帯で、現在の東西勢力の緩衝地域の役割も果している。もっとも、細

密にはラオス内部にも南北差が認められるし、カンボジアはインド文化圏にも入れられるのである。これらは単なる偶然ではなく、歴史の流れとしての地域の性格が今なおここに顕現されていると理解すべきであろう。

その他各民族間の反目に関しては、平地を追われて辺境地区に入った民族と、平地の民族との感情的対立、歴史的な民族の勢力拡張による各民族間の抗争による反目は、いままなお重要な意義を持つている。前者はタイ・ラオス・カンボジア・ベトナムの平地住民に対する、山間高地・岬角・島その他の少数民族の感情があげられる。後者の例では、一七九五年にシャムは、カンボジアのバツタンバンとアンコールを占領し、一九〇七年まで領有していた。一八二七年にラオスは、シャムの領土拡張でふみにじられ、徹底的に破壊され、数千人の住民がシャム東北部に連れ去られている。また、一八世紀にアンナンはクメール領にまでその勢力を拡張した。一九世紀の初めにも、カンボジアの国王はベトナムに毎年貢物を献上していたし、一八三四年にカンボジアのアン・チャン王が没するとベトナムは王女アン・メイを王位につけ、一方カンボジア駐在のベトナム人将軍は、カンボジアのベトナム化に乗り出した。役人たちはベトナム服を着用し、髪を結ばねばならなかった。また、ベトナム式大乘仏教への帰依が強制され、地方のカンボジア人は強制労働に服させられた。一八四〇年代には、カンボジアは、ベトナムとタイの挾撃にあっている。これらは一例であるが、長い歴史の流れの影響が今もお続いているのである。ここにも東西文化の接点であるラオスとカンボジアは、中間的性格を示していることが理解されるのである。

### むすび

(一) インドシナ半島には、元来マレー系人種がおった。これをモンクメール系諸族（オーストロアジア語族）クメー

ル族・モン族などV)が駆逐して、半島の大部分を占拠し、インド文明の強大な国家を建設した(フーナン・チェンラ)。つぎに、インドシナ語族と呼ばれるモンゴロイドの大集団(ビルマ族・タイ族など)が南下し、先住民族を圧迫断絶した。また、半島の東海岸には、強くシナ文明の影響を受けたアンナン人が南下して、先住のモイ族を山地に追いあげ、南下してチャム族を圧迫した。その他、ごく最近の世紀に先住地の環境に類似した高地に、中国南部から移住した者もある(メオ・ヤオ)。民族の移動は、自然条件の制約が大きかった古い時代に多かったので、一層地域的制約や影響を受け、沿岸とその平野・河川沿いの谷間・デルタ・盆地や山間高地・岬角・島など、複雑な移動形態による分布構成を示すようになった。

(二) インドシナの文明は、アンナン山脈を中心にして、東方に中国文明、西南方にインド文明の影響が強かった。しかし、細部には一九世紀当時の緩衝地域であったラオス・カンボジアは、複合的性格が強い。これも年代が新しくなるに従って複合化して来たものと考えられる。

(三) 政治地域の形成は、民族移動の頻度やその量に影響されているように考えられる。アンナン山脈西部では、歴史上比較的明確なフーナン国が二世紀から存在し、それがチェンラに変化し、やがてクメール時代に入っている。タイでは、チェンセン時代からスコタイ、アユタヤと変化し、トンブリ・バンコク時代に入るが、その変化はめまぐるしく、国家の形成期間も短い。ラオスは山国であり、一四世紀から初めて国家形成が認められる程度であった。これに比較し、アンナン山脈東部は海岸であり、チャンパ国が二世紀から約一三世紀もの長い年間その国名をとどめており、一〇世紀頃よりアンナン国が生じ、これも八世紀以上も存続している。前者は民族移動の頻度や量のメインラインであり、後者のローカルラインに比較して顕著であった。それは前者の地域がエクメーネ(Okinene)とし

ての魅力が強かったことと、地理的影響によるものと判断され、民族の逐条的移動と、先住・後来の関連による変化の激動が、錯雑と単調の差となって現われたものと考えられる。

(四) インドシナの各民族の性格は、民族移動の方向や、先住・後来の関係、そしてそれに影響された分布地区の自然環境の差異により、長い年月の間にそれぞれが特徴づけられた。ハンチントンの「気候と文明」を引用するまでもなく、北部の勤勉性に対する南部の怠惰性の差異が認められ、また、先住民族に対する後来民族の圧迫対立、これらの傾向は、他の外来勢力により一時中断されることはあったとしても、インドシナ各国は、彼らの「栄光の過去」に主張の根拠をおき、ライバル状態に戻る危険性や方向性を内在する地域と考えられる。

(五) インドシナ地域は、地形的・気候的・民族的・文化的・政治経済的に統一性に欠けており、歴史的にも分離性の強い地域である。現在も大別して東風の和西風のに分類される。昔から北部と南部の出会い、行きちがいの場所であり、各民族の流れや、各主義間の抗争の戦場であったと同様、現在では東西問題も南北問題も両面兼ね備えた地域である。政治・経済や文化・思想的に、しかも多くの人種間のナシヨナリズムやローカルナシヨナリズムなど、複合性が強い地域で、東西生命力の生長先端の中におかれ、大きな混乱となり国際的に過敏な地域で、流動性に富んでいる。これらは古来より河川流域により通過が容易な北部山地が北方との境界性に乏しく、一方南部は海に面し、サーキュレーション(交流)に富んだ半島の性格にその一面を求めることが歴史地理的立場からも知ることができるのである。なお、植民地化過程と、それ以降の課題は、別に解明されなければならない。

注

(一) (2) E. H. G. Dobby; South East Asia, 小堀巖訳、三二〇頁、一九六一。

- (3) 浮田典良、東南アジア、世界地理民族誌、姫岡・藤岡編、一二五～一二六頁、一九五七。
- (4) 小川徹、世界地理大系、五、一二八～一二九頁、一九五二。
- (5) (6) Lê Thanh Khôi; HISTOIRE DE L'ASIE DU SUD~EST, Original Copyright by Presses Universitaires de France, 1951, 石沢良昭訳、白水社、四七頁、一九七〇。
- (7) Charles A. Fisher; South East Asia, A. Social Economic and Political Geography. pp. 104~105, 1965
- (8) 前掲(5)、一二四頁、一九七〇。
- (9) 前掲(7)、一〇五頁、一九六五。
- (10) 石田幹之助著、南海に関する支那史料、生活社、一〇七頁、一九四五。
- (11) カンボジア王国、世界各国便覧叢書、外務省アジア局編、日本国際問題研究所、一一頁、一九六七。
- (12) 佐藤弘編、南方共栄圏の全貌、九八頁、一九四三。
- (13) (14) (15) 前掲(7)、一〇九～一二二頁、一九六五。
- (16) カンボジア王国、世界各国便覧叢書、外務省アジア局編、日本国際問題研究所、一三頁、一九六七。
- (17) 前掲(18)、二五～二六頁、一九七〇。
- (18) 世界史大系、六、インド・東南アジア、二五一～二五二、一九六三。
- (19) 坂本徳松著、東南アジアの新しい理解のために、一一五～一一六、一九六七。
- (20) 前掲(8)、六二頁、一九六七。
- (21) 前掲(19)、一一七～一一八頁、一九六七。
- (22) 菊池一雅著、ベトナムの農民、古今書院、二八頁、一九六六。
- (23) 前掲(7)、一一二頁、一九六五。
- (24) 米倉二郎、インドシナ諸國、新世界地理、4、東南アジア、渡辺光編、一四二頁、一九五九。
- (25) 岩田孝三、タイ・新世界地理、渡辺光編、一一一頁、一九五九。
- (26) 岩田孝三、タイ国の政治地理、政治地理、第三集、日本政治地理学会、九四頁、一九六八。
- (27) 前掲(19)、一七〇頁、一九六七。



- (28) (29) 前掲(19)と前掲(26)によるところが多い。  
 (30) 前掲(7) 一一三頁、一九六五。  
 (31) ラオス王国、世界各国便覧叢書、外務省アジア局編、日本国際問題研究所、五六頁、一九六七。  
 (32) Hugh Toye: Laos, Buffer State or Battle Ground, London Oxford University Press, p.16, 1968  
 (33) 前掲(31) 六頁、一九六七。  
 (34) 前掲(8) 一〇二頁、一九七〇。  
 (35) ベトナム、世界各国便覧叢書、外務省アジア局編、日本国際問題研究所、一二頁、一九六七。  
 (36) (37) (38) (39) (40) 東南アジア政治経済総覧、上巻、アジア協会編、各国ごとの項目を参照、一九五七。  
 (41) André Masson: Histoire du Vietnam, Original Copyright by Presses Universitaires de France, 杉辺利英、根  
 本長兵衛共訳、白水社、九六〇九七頁、一九七〇。  
 (42) 前掲(31) 六〇七頁、一九五七。  
 (43) 前掲(11) 四頁、一九六七。  
 (44) 佐藤弘編、南方共栄圏の全貌、三九三頁、一九四三。  
 (45) 中島宗一、印度支那民族誌、満鉄東西経済調査局編、一九四三。  
 (46) 前掲(44) 三九四頁、一九五七。  
 (47) 前掲(44) 三九一頁、一九五七。  
 (48) ベトナム、世界各国便覧叢書、外務省アジア局編、日本国際問題研究所、六頁、一九六七。  
 (49) 前掲(41) 一四頁、一九七〇。  
 (50) 前掲(44) 三九二頁、一九四三。  
 (51) 南洋叢書、第4巻、シャム篇、東亜経済研究所、三五頁、一九四一。  
 (52) 前掲(44) 三九八頁、一九四三。  
 (53) 世界大百科事典、二一、平凡社、三七一頁、一九六七。  
 (54) 前掲(45) 一九四三。

- (55) (56) 前掲(44) 三九四～三九五頁、一九四三。
- (57) 浮田典良、東南アジア、世界地理民族誌、姫岡、藤岡編、一三四頁、一九五七。
- (58) 松本信広著、印度支那の民族と文化、五三～五五頁、一九四二。
- (59) 前掲(41) 一〇三頁、一九七〇。